

民具7(蓄音機とレコード)

大野城市教育委員会

蓄音機とは

レコードプレーヤーの前身ともいうべきこの装置は、元々は音を蓄える(録音する)機械であったことからこの名が付けました。

1877年(明治10年)トーマス・エジソンが錫箔円筒型蓄音機を發明すると、人々は大変驚きました。この機械に声を吹き込むと、同じ声を再生することに成功したからです。

初めは電信や電話と同類の事務用機器としての需要が高く、口述記録と再生の機械として発展していきました。その後、蓄音機の形は円筒型から円盤型へと変化していき、その機能は記録より再生が重視されていきます。そうして登場するのが再生専用の蓄音機です。これに伴い音の吹き込まれた円盤レコードが大量に作られ、色々な音楽を手軽に楽しむことができるようになりました。



円筒型蓄音機 (石川県立博物館提供)



国産の円盤型蓄音機 (PENGUIN社製)

円盤型蓄音機

日本では1901年(明治34年)三光堂が最初に再生専用の円盤型蓄音機の輸入販売を始めました。従来の円筒型蓄音機と性能上の違いを示すため「寫聲機」という名前もあったようです。

左の写真は、ポータブル型でたためば小さなトランクになり、持ち運び自在という便利な蓄音機です。電源不要なので、日本舞踊のお師匠さんや、温泉街の芸者さんなどは近年まで愛用していたようです。

蓄音機を鳴らす時は、円盤の上にレコードを乗せゼンマイを巻いて回転させます。その時、針がレコードの音溝をたどって振動を起します。これが機械的に増幅され金属の振動板に伝わり、音を再生するというしくみです。

レコードは発売当初「平円盤」と呼ばれ謡曲、詩吟、長唄、三味線、義太夫、端唄などが人気でした。



いろいろなレコード

平円盤とレコード

明治時代後期に入ると、平円盤はレコードと呼ばれるようになりました。シュラックという樹脂^{じょし}で作られ、1分間に78回転するものでした。片面のみに音が吹き込まれており、4～5分間録音されていました。1903年（明治36年）発売時のレコード価格は2円～4円したそうです。その当時、もりそば1枚が1銭したといえますから、レコードは大変高価なものだったといえるでしょう。

大正時代に入ると、両面録音されたレコードも作られるようになります。そして1948年（昭和23年）片面で30分録音できるLP（Long Playing）盤が登場し、その録音時間は飛躍的^{ひやくてき}ののびました。

LP盤はバイナル（ビニール）などで作られ1分間に33 $\frac{1}{3}$ 回転しました。SP盤より音質は良くなりましたが、音溝が細くなったことから、電蓄^{でんちく}（電気蓄音機）やレコードプレーヤーが必要となりました。このLP盤の登場によって、従来の平円盤はSP盤（Standard Playing）と呼ばれるようになります。

1949年には、同じ材質・音溝で1分間に45回転し5分間の収録ができるEP盤（Extended Play）が登場します。中心の穴の部分が大きいので、ドーナツ盤と呼ばれて親しまれました。

参考文献

- ・『蓄音機の歴史』 PARCO 1976年
- ・『「声」の資本主義』 講談社 1995年
- ・『モダンの調べ 蓄音機』 石川県立歴史博物館 1997年
- ・『蓄音機の時代』 ショパン 2006年